

## 令和3年度霞ヶ浦学講座第13講「古文書が語る土浦の植物」実施報告案

実施日時：令和3年12月12日（日）13:30-15:00

場所：霞ヶ浦環境科学センター多目的ホール

講師：木塚久仁子氏（土浦市立博物館副館長） 参加者数：35名

講演タイトル「古文書が語る土浦の植物」

### 概要

今回ご紹介する古文書は、土浦市立博物館所蔵「内田家文書」の「日記」です。

この日記は、東崎町（現土浦市東崎町・大和町・川口）の町年寄内田久右衛門得階が、土浦藩に提出した文書の控えや、藩から出された達書などを書き留めておいたものです。

なお当時の日記は、誰かに読まれることが前提となっています。毎日の天候、相場や物価、出産や人別の移動、家普請、寺社、川除等の記録も記載されています。

この中に、享保20年(1735年)10月19日付で東崎町の「産物調」が記されています。江戸幕府第8代将軍徳川吉宗は、国内の動植物や農作物などの諸国産物調査を

行いました。全国的にも現存している「産物帳」は少なく、常陸国では、この1件のみとなり、貴重なものです。

東崎町では調査の結果、草93種、水草26種、前栽（野菜）46種、木7種など合計253種が記録されています。

草のうち、22種に「かてに仕り候」と記されています。「かて」とは飯を炊くとき量を増すために混ぜて加えるもの、また、それを加えた飯になります。たんぼぼ、せり、おんはこ（オオバコ）などが記載されています。

早稲7種、中手9種など多種のイネが記録されています。刈り取り時期をずらして農作業を分散させ、風水害に対応しようとしていた知恵がうかがえます。

水草のなかには現代の現在の霞ヶ浦にはほとんど見られないものもあります。以下のように様々な抽水植物、浮葉植物、沈水植物、浮漂植物などが記されています。

・抽水植物・・・葉と茎を水面に出す植物

あふひ（ミズアオイ）、川戸（コウホネ）、はす、まこも、かぼ（ガマ）など

・浮葉植物・・・葉を水面に浮かべる植物

ひし、じゅんさへ（ジュンサイ）

・沈水植物・・・全体が水に沈む植物

うなきもく（セキショウモ）、ゑひもく（エビモ）、おんぼくもく（ミズオオバコ）など

・浮漂植物・・・水中や水面に浮く植物

かかみもく（トチカガミ）など

古文書の記録と現在の霞ヶ浦の植物を比べて明らかなことは、現在では沈水植物が、ほとんど見られないことです。なお、霞ヶ浦では富栄養化の進行に伴い、透明度が悪化したことなどにより、減少しました。

また、江戸時代の霞ヶ浦ではモク採り（モクトリ、藻草刈り）が行われ、採取された藻は肥料として畑、水田に使用されました。これは水中の窒素、リンを陸上へ回収することにもなります。このように江戸時代の霞ヶ浦は「里湖（さとうみ）」として、暮らしと結びつき、活用されていました。なお、もく取りは、昭和30代頃まで行われていました。

私たちは、古文書を通して、江戸時代の霞ヶ浦、霞ヶ浦とのかかわりあいについて

学ぶことができると思います。未来の霞ヶ浦を考えるうえでも古文書から学ぶことは多いと思います。



(文責 小川)

### 所感

今回の霞ヶ浦学講座は「古文書」を切り口としたこともあり、初めて講座に参加した方が多かったです。参加者の皆様は、「古文書」を通して過去の霞ヶ浦について学ぶことができ、さらに現在の霞ヶ浦と比較することにより、新たな発見もあり、霞ヶ浦の見方を深めることができたのではないかと思います。

霞ヶ浦に興味・関心を持ってもらうには生命環境科学的なテーマに加え、人文科学的な視点も重要に思いました。